

いっただら

ESSAY

倉元 信行

23

演 じ る

家族ノートをめくってみると、桂枝雀を聴きに行ったのは平成6年の暮れと分かる。私が落語が好きで、特に枝雀が好きだと言っていたのを覚えておいてくれた落語愛好家のO君が券をとってくれたのである。

上野鈴本での席は補助席ではあるが一番前だった。その夜、長屋の若後家との再婚話である“不動坊”と、1銭のたまごで見る夢を追いかける“夢たまご”の二題を彼は身体中で演じた。

腹の底から笑わせる、まさに怪演であった。名人だと思った。

テレビでも感じていたが、一つ気づいたのは彼の目は決して笑っていないことだった。顔中で、身体中で笑っているのだが目だけは笑っていない。本物の芸人だと思った。

よくテレビで自分の喋ったことに自分でおかしく笑っているような落語家がいるが、あれでは名人になれない。そう私は思っている。

三年後の平成9年にも、私はこの鈴本の“年忘れ上方落語会”に出かけている。この時は、師匠の米朝と枝雀を連夜で楽しんだ。

枝雀さんが自殺した時の記事によって、私が二度聴きに行ったこの頃、彼が必死で心の病と闘っていたことを初めて知った。

もしかしたら彼は落語を演じることにではなく、名人であることを演じるのことに疲れていたのかもしれない。ふとそう思った。

一流と呼ばれる人たちは、一流であるというその事に相当の重荷を背負って歩いているものだから。英語落語までやった爆笑王にはそんな重荷は背負ってほしくなかったのにと、

勝手に思ってしまった。

考えてみれば私たちサラリーマンも役者のようなものかもしれない。営業部長は営業部長の役をきちんと演じなければならない。文字どおり役職なのだ。

突然思ってもいけない役がくることもある。それも演じなければならない。

名社長などと言われる人は大変だ。何しろ名社長を見事に演じてみせなければならないのだから。

会社で立派に役を演じて、夫としての演技がまずくて妻に幕を引かれる人もいる。どんな立場でも、きちんと演じるというのはなかなか大変なことなのだ。

